学生卒業設計制作NCF空間ディスプレイアワード受賞作品

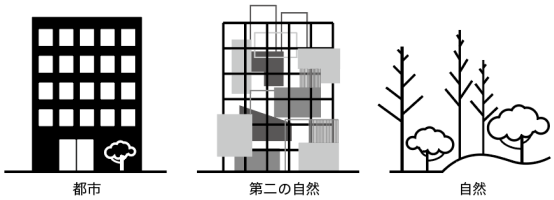
受賞年	2023年	
受賞タイトル	**優秀賞**	
区　分	Ⅳ．都市ディスプレイデザイン	
フリガナ	ヤマオカ ケイタ	
制作者名	山岡 敬汰	
フリガナ		
卒業時の大学 学部・学科	大同大学 工学部 建築学科	
フリガナ	フナハシ ニナ	職名
推薦者名	船橋 仁奈	准教授
フリガナ	トシノアジール	
作品名	都市のアジール	

概　要

■ 都市のアジール:新たな都市の空間性

私の考える新たな都市の空間性とは、人々が建築の機能や用途に縛られず、各々が自由に選択し利活用していく空間の事を指す。

アジールとは、直訳すると聖域であり、人間の定めたルールの効力が及ばない領域を意味する。かつては、森がアジールとされ、人々の様々な思いを受け止める場であった。
本設計では、建築的ルールに捉われない、人々の様々な活動を受け入れる祝祭空間を「**都市のアジール**」と位置づけ、新たな公共空間の確立を目指す。



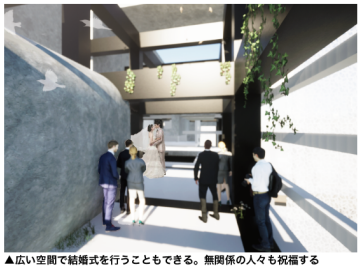
▲都市空間におけるアジール<第二の自然>のイメージ

■ アジール空間を構成する3つのスケール

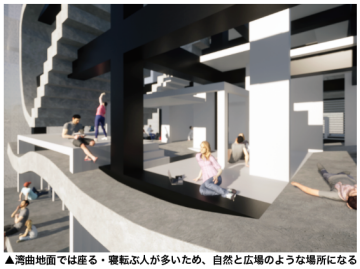
①身体スケール：建築の機能空間がもつスケール
②ラージネススケール：機能空間から外れたスケール
③アジールスケール：①と②を掛け合わせたスケール
３つのスケールの重なりによって生まれた空間は、建築的ルールを超えた、時には不恰好で、融通の利かない大小様々な空間である。ここでは、各個人が空間のサイズや形そのものと向き合わなければならない。しかしそれが人々の思考を促し、新たな価値を創造する足掛かりとなる。

■ 活動によってアップデートされる空間

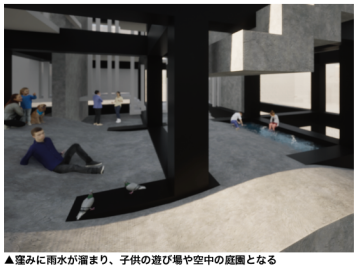
多様な人々の活動拠点となるアジール空間では、人々の行為によってその場の持つ意味が常に更新されていく。ここには、利用者の数だけ場の中心が存在し、その利用者は人間に限定されるものでもない。まさに都市の中にある森のような空間であり、空間に対する解釈や認識、そしてその可能性を押し広げるものであると考える。



▲広い空間で結婚式を行うこともできる。無関係の人々も祝福する



▲湾曲地面では座る・寝転ぶ人が多いため、自然と広場のような場所になる



▲窪みに雨水が溜まり、子供の遊び場や空中の庭園となる

制作者名	山岡 敬汰
作品名	都市のアジール

【コンセプト解説】

たくさんの中心を有する都市空間

■利用者の意思や要求を受け入れる

名古屋駅には「タワーズガーデン」という駅前広場があり、市民はここを「カップル広場」と呼ぶ。昼間は人気のないこの広場は、夜になるとカップル達で賑わいを見せる。人々が利用する中で、当初の目的とは異なる目的を生み活用されている身近な事例である。人はなぜ愛着をもってこの場を利用しているのだろうかと考えた時に、設計者の目線と、現実の人々の目線との間にギャップが生じているのではないかと感じた。建築家の意思とは関係なく、各個人が自分の意志でその広場と向き合っているのである。街を歩いていると、何の変哲もないような場所に人が集まっていたり、裏通りや路地空間が賑わっていたりする。人々のニーズに合わせて都市は日々、自然とその姿を変えている。元来、都市はもっと自由な人々の活動を受け入れる場で良い気がする。都市を歩いて、知って、使ってみようと感じさせるような空間こそが今、求められているのではないか。様々な活動の拠点となるアジール空間では、人々が自分自身で使い方や目的を定め、自由に使いこなしていく。その結果、一つの総体でありながら、沢山の中心が存在するような建築となる。この建築には、利用者の数だけ中心が存在し、その利用者は人間に限定されたものでもない。まさに都市の中にある森のような空間なのである。

現代社会におけるアジール論

■アジールとは

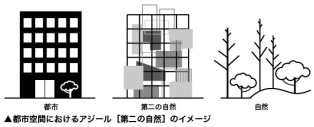
「アジール」とは、直訳すると「聖域」であり、何ものにも縛られず統治権力が及ばない場所を指す。つまりは人間の定めたルールの効力が及ばない領域のことを意味している。かつては、森がアジールとされており、人々の様々な思いを受け止める救いの場であった。
本設計では、建築的ルールに捉われない人々の様々な活動を受け入れる祝祭空間を「都市のアジール」と位置づけ、新たな公共空間の確立を目指す。

▲自然界におけるアジール

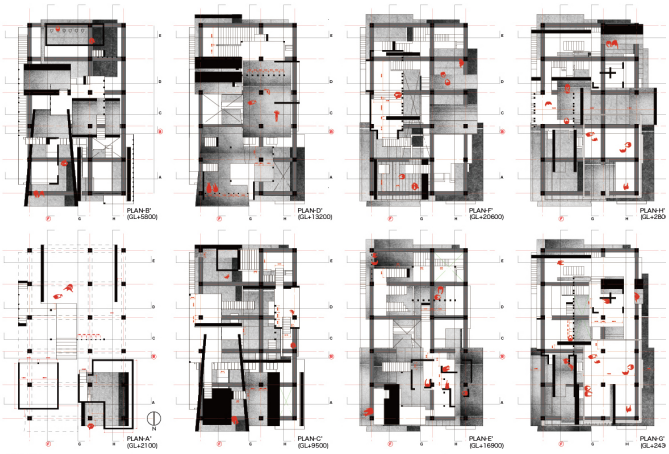
▲日本におけるアジール［普提寺福昌寺跡］

■ 第二の自然

私の考える新たな都市の空間性とは、人々が建築の機能や用途に縛られず、各々が自由に選択し利活用していく空間のことを指す。建築物が外皮をまとい、用途や機能をもち、人々の生活を守るものだとすると、まさに建築物からそれらの機能が失われ「残ったものだけの状態（フレーム）」の事であると言える。そして、だからこそ別の力を有する空間になるのではないかと考えた。私は、その状態を「都市のアジール」と名づけ、都市における精神のよりどころとなる空間を設計する。



▲都市空間におけるアジール［第二の自然］のイメージ



▲PLAN

都市のアジール

■計画地：愛知県名古屋市中区

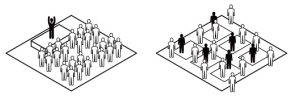
恐らくアジールは、それを求める人がいる限り、どこにでも建設可能な空間である。都心部には都心部の、郊外には郊外の、農村部には農村部のアジールの在り方があるだろう。本設計では、愛知県名古屋市中区に建つオフィスビルの改修を行う。
ここには以前、白山神社という神社が存在したが、第二次世界大戦や桜通開通などの影響により、白山神社は縮小され、現在は桜通を挟んだ向かい側の敷地に移転している。敷地や既存建築には神社の面影はないが、かつては人々の心の拠り所となった場所であり、周辺にはその名残が今現在も残っている。名古屋の中心地に、新たな人々の活動の拠り所となる都市空間を創出する。

▲SECTION-F

アジール空間の構成

■伽藍とバザール

E・レイモンドの論文「伽藍とバザール」では、ソフトウェア開発の方法論として伽藍方式とバザール方式が対比的に示されている。伽藍方式は、設計者が全ての計画と体制を確立して開発していく一方、バザール方式は、知らない者同士がバザーで売買するようにアイデアや技術を持ち寄ってアップデートしていく。バザール方式では、全体を取りまとめる者がいないにも関わらず、それなりの秩序を保ったコミュニティが成立している点が特徴と言える。私はこれを元に、人と建築の新たな関係について考える。



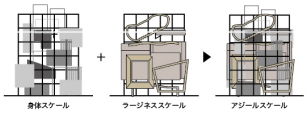
▲伽藍[Cathedral]とバザール[Bazaar]における方法論

■精神性と更新性

本建築には、既存建築の構造フレームによるハードとしての<カテドラルの精神性>と、利用者の行為によるソフトとしての<バザールの更新性>が混在している。その結果、内部空間には、フレームと構築物によっていくつもの中心が生まれる。使用する人々によって各々の活動の中心が常に変化し、様々な境界が生み出されることとなる。人々の行為によってその場の持つ意味が常に更新されていくのである。第2の地形ともいうべきこの空間では、都市の精神性を宿したフレームだけが変わらず残り続ける。

■設計手法：複合性の体系

人が容易に介入できる空間、そして更新性とは何か。それらを実現するためには、人々が積極的に関わっていくためのシステムが必要である。そこで私は、複数のスケールを重ね合わせることによる新たな「複合性の体系」を見出したいと考えた。
具体的には、①建築の機能空間がもつスケールと②建築の機能空間から外れたスケールの掛け合わせによって生まれる空間であり、それは、私たちの建築的ルールを超えた、時には不怡好で、融通の利かない大小様々な空間である。ここでは、建築家の意思などとは関係なく、各個人が空間のサイズや形そのものと向き合わなければならない。しかしそれが、人々の思考を促し、建築と人の関係性をより強くしてくれるものなのだ。



▲アジール空間を構成する３つのスケール

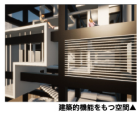
アジールスケール

■３つのスケールの重なり

アジール空間は、以下の３つのスケールによって構成される
①身体スケール：建築の機能空間がもつスケール
②ラージネススケール：建築の機能空間から外れたスケール
③アジールスケール：上記の２つを掛け合わせたスケール
これらを掛け合わせた空間は、様々な人々の活動を受け入れる。そこは かつての森と同じような質をもつ第二の大地となる。

①身体スケール ▶

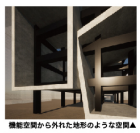
身体スケールとは、都市における機能空間を指す。機能性や利便性、合理性を優先し、人々の日常生活を支える重要なスケールである。部屋や階段など、具体的な用途に多く見られる。



建築的機能をもつ空間▲

②ラージネススケール ▶

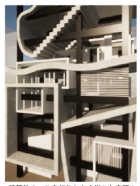
これは自然に該当する、機能空間から外れた寸法を指す。機能やルールは持たず、不規則な形、方向、角度、大きさがあり、地形の様な空間性がある。具体的な使い方をイメージしにくい空間である。



機能空間から外れた地形のような空間▲

③アジールスケール ▶

身体スケールとラージネススケールの融合により生じた空間であり、第二の自然に該当する。子供は子供スケール、大人は大人スケール、動物は動物スケールとして、あらゆる生き物が自分に合ったスケールを発見し、使いこなしていく事ができる。そこは自然に生まれた大地のような空間であり、人工的に生まれた建築のようでもある。人々に様々な空間的気づきを与え、様々な空間が更新され続ける。



建築的ルールを超えた大小様々な空間▲

▲実側模型写真：３つのスケールの重ね合わせによる様々な空間